

「わたくしは自分自身をシンドラーのリストに書き入れた」 —ヒルデ・ベルガーとロゼ・ベルガーの物語り— (IV)

ラインハルト・ヘッセ* 編著

船尾 日出志** 城田 純平*** 今泉 尚子**** 訳

* フライブルク教育大学元教授

** 名誉教授

*** 人間環境大学講師

**** 早稲田大学大学院生

“Ich schrieb mich selbst auf Schindlers Liste” Die Geschichte von Hilde und Rose Berger. (IV)

Reinhard HESSE*,

Hideshi FUNAO**, Junpei SHIROTA*** and Naoko IMAIZUMI****

*Hauptstrasse 23 CH-8280-Kreuzlingen/Bodensee, Switzerland

**Professor Emeritus of AUE, Kariya 448-5542, Japan

***Full-time Lecturer of University of Human Environments, Okazaki 444-3505, Japan

****Graduate student of Waseda University, Tokyo 169-8050, Japan

序

船尾は友人の哲学者ラインハルト・ヘッセ先生より、2014年9月に1冊の本(“Ich schrieb mich selbst auf Schindlers Liste. Die Geschichte von Hilde und Rose Berger” Haland & Wirth im Psychosozial-Verlag, Gießen 2013)をご恵贈いただいた。意外にも哲学書でなく、艱難辛苦のナチス時代をкаろうじて生き抜いた2人のユダヤ人女性ヒルデとロゼの半生に関するものであった。そしてその本の大部分は2人の女性自身の回顧録およびインタビュー記録から構成されている。目次は次のようになっている。

導入

ベルトホルト・バイツによる序言

ヘッセ先生による序文

I ヒルデ・ベルガーの物語り

テキスト1「ヒルデ・ベルガーが自身の人生(1914 - 1945)を語る」

テキスト2「マーク・スミスのヒルデ・ベルガーとの対話」

テキスト3「ハロルド・ツイリンおよびマリー・ツイリンのヒルデ・ベルガーとの対話」

II ロゼ・ベルガーの物語り

テキスト4「マリー・ツイリンのロゼ・ベルガーとの対話」

テキスト5「クラレンス・マクリモンドのロゼ・ベルガーとの対話」

ヘッセ先生による結語にかわる書簡

この第4報は3つの部分から成る。第1の部分ではテキスト1の残り、原著の55頁から57頁までの正味2頁分を翻訳する。ヒルデ・ベルガーの強制収容所からの解放の前後の時期が簡潔に描かれている。すなわちナチスドイツ軍が東部戦線から後退する1945年初めから、ヒルデがまるで映画のラストシーンのように空路ストックホルムに到着する1945年10月8日までの時期である。

スティーブン・スティルバーグの名作映画『シンドラーのリスト』のなかの数ある印象的な場面のなかでも、特に印象

的な場面、すなわちオスカー・シンドラがドイツの敗北とユダヤ人の解放を告げるシーンを、ヒルデは自分の記憶にもとづいて描いている。明らかにヒルデは、多くのユダヤ人がそうであったように、シンドラをユダヤ人の恩人であると考えているようである。

しかし強制収容所において支援してくれたベルトホルト・バイツについては、ヒルデの感謝の気持ちは「愛憎相半ばする」とまでは言わないにしても、100%のものとはいえない。そのことはバイツとヒルデが戦後に交換した4つの書簡から分かる。それらの書簡は原著では巻末の付録の部分で読むことができる。この報告の第2の部分はその4つの書簡の翻訳と紹介である。

この報告の第3の部分は、テキスト2「マーク・スミスのヒルデ・ベルガーとの対話」の翻訳である。このテキストは、ニューヨークのジャーナリストで、そしてヒルデと夫、アレックス・オルゼンの友人であるマーク・スミスが1978年6月に3日連続でヒルデ・ベルガーにたいして行ったインタビューの記録である。マーク・スミスはここでヒルデ・ベルガー（・オルゼン）に1914年の出生から1935年までの人生にまつわるさまざまな出来事について尋ねた。そのテキスト2は原著の59頁から118頁であるが、第4報では最初の5頁のみを翻訳している。ヒルデの子ども時代の家庭状況、とりわけ敬虔なユダヤ教徒で、家父長的な父親と父親からのネガティブな影響に押しつぶされる姉の様子が印象的である。

ヘッセ先生及び出版社より日本語への翻訳、および愛教大研究報告における発表の許可をいただいている。《 》は原文にある補足説明であり、【 】内は訳者による補足ないし注釈である。

キーワード：ドイツの降伏（die deutsche Kapitulation）、素行証明（Leumundszeugnis）

I ヒルデ・ベルガーの物語り

1. テキスト1：ヒルデ・ベルガーが自身の人生（1914-1945）について語る

ニューヨーク 1980年11月24日

（承前）

しかしブルニェッツでは何も準備されていなかった。わたくしたちは、寝台が組み立てられるまでは、床の上で寝なければならなかった。厳寒だったが、しかしアウシュヴィッツから離れられたことはラッキーだった。ブルニェッツの収容所は親衛隊（SS）によって監視されていた。そこでの親衛隊員はたいがい高齢者であり、つねに武装していた。電気フェンスは設置されていなかったが、脱出は不可能であった。幸運なことに、わたくしはわたくしの良き評判ゆえに再び事務仕事に採用された。ブルニェッツにおけるわたくしたちの滞在の最初の2か月間、所長のシンドラはわたくしたちのために追加の食べ物を調達してくれた。それを、かれはポーランドからの貨車で運ばせた。かれはポーランドと良い関係にあったのだ。しかし1945年初め、東部戦線がますます近づいてきたとき、それはもはや不可能となった。それ以降、わたくしたちは本当に飢え死にしかねない僅かな食べ物しか得なかった。1日に1度、朝、ごく小さな一切れのパンしかなかった。昼食時と夕食時に、わたくしたちは薄い赤かぶスープを得た。そのスープのなかには1つないし2つのジャガイモが泳いでいた。（今日まで、わたくしは赤かぶスープを食べることはできない。）わたくしたちは食べ物について、ないし何も食べるものが

ないということについて以外のほぼ何も語らなかった。わたくしは、一塊のパンを夢に見たことを思い出す。そのパンはわたくしだけのものであり、そして自分のために一切れずつ切るのだ。

飢えという問題以外に、わたくしたちはさらに、悪質な、偏執的な反ユダヤ主義者であった収容所司令官とかかわらねばならなかった。かれはかなり若い親衛隊員であった。かれはわたくしたちに出会うたびに、わたくしたちを踏みつけ、そして殴った。戦争の最後の数か月の間ずっと、かれは怒鳴り散らしていた。わたくしたちは本当に、かれがわたくしたちを生かすだろうとは望むべくもなかった。

終戦になるまでに、わたくしたち全員を射殺するという継続的な脅しがわたくしたちを不安にさせた。そこでわたくしたちはシンドラと話をすべき小さな委員会を選抜した。シンドラは、わたくしたちを救うことを固く決心していると、そして必要な場合にはかれに武器を提供することを約束しているブルニェッツの秘密抵抗組織と接触していると、わたくしたちに断言した。

しかしそういう事態にはならなかった。1945年4月末頃、つまり終戦の2週間前に収容所司令官は消えた。明らかに自分の安全への不安のために。そしてかれと一緒にほとんどの親衛隊の看守たちも消えた。わたくしたちは、きわめて穏健な若干の看守たちと一緒に留まった。その時点から、わたくしたちは自由に呼吸をすることができ、そして生き延びることができると確信した。

1945年5月9日、ドイツの降伏後、シンドラはわたくしたち全員を工場に集め、そして公式のスピーチを行った。かれは、今やわたくしたちは自由であると

語った。かれはわたくしたちに、身分証明書を得るまで秩序と規律を維持するよう願った。身分証明書を得れば、わたくしたちは移動することができる。わたくしたちは収容所委員会を選んだ。その委員会は収容所の秩序維持に尽力し、そして身分証明書をチェコ語、英語およびポルトガル語でタイピングした。身分証明書にはブルニェツの市長の署名が記載されていた。

わたくしたちの多くはまるで穴に落ちたようであった。若干の者は泣き、そして何をなすべきか、どこに行くべきか分からなかった。多くの者は、クバとわたくしも同様だったのだが、ポーランドに行くことに決心した。まだ親戚が生きているかどうかを確認するために。

身分証明書をもつことで、わたくしたちは無料で旅をすることができた。そして今回はまったく違った旅であった。最後尾の2両の貨車はわたくしたち専用であり、そしてチェコ人が大きな文字で「Konzentrackis」と書いた。チェコのどの駅でも人々は花や果物や食べ物を持ってきてくれて、そしてわたくしたちが生き延びたことをお祝いしてくれた。その雰囲気は、わたくしたちが国境を越えてポーランドに入るや劇的に変化した。ポーランド人は列車のところにやってきて、そしてわたくしたちをじろじろ見て、そして言った。「みなさんの多くは生き残ったのですね。わたくしたちは、ヒトラーはみなさん全員を道連れに自殺するだろうと考えていました。」

わたくしたちがクラカウに到着したとき、そこには、わたくしたちには周知であったように、ユダヤ人の大きな委員会が存在したのだが、ユダヤ人の生き残りを殺害したポーランドについての残忍な話を聞いた。殺されたユダヤ人の生き残りは自分の店や財産をとり戻そうとしただけなのに。再びポーランドに戻ったことは、わたくしには幸福とは思えなかった。そして数週間後、わたくしは親戚の誰かをみつけるという望みを失った。

わたくしはストックホルムにいる友人のハナーに電報を送った。かの女の住所は覚えていた。その1週間後、わたくしはまだ何かの女から返事を得ていなかったが、チェコスロヴァキア、プラハに戻ることに決めた。クバとの別れは、わたくしにとって非常に辛いものだった。それは、わたくしがその時点からは自分だけで生きてくことも意味した。

わたくしは1945年9月に到着し、そして「住む場所がない人々」のための収容施設に登録された。そこにおいて、わたくしは再び事務所で働いた。

パレスチナからの使節団がいた。その使節団は「住む場所がない人々」のパレスチナへの移民を組織した。かなりの数の人々がパレスチナへの移住を申し込んだ。永住できる我が家を見つけられるという希望を持って。

プラハに到着後すぐ、わたくしはもう一度ストックホルムに電報を送った。今度は5日後にハナーからの返事があった。わたくしにとって大きな喜びであった。かの女はわたくしに、プラハに留まり、そしてスウェーデンへの入国査証（ビザ）を取得するまで待つように願った。ビザについては、かの女はわたくしのため尽力するつもりだとも。2週間ないし3週間後、わたくしはスウェーデンへの入国査証を得た。その後わたくしは国際赤十字に行き、暫定的旅行証明書をえた。

1945年10月8日、わたくしを乗せたストックホルム行き飛行機がプラハを離れた。わたくしはまるでメルヘンのなかにいるような気がした。飛行機が着陸体勢になったとき、わたくしは何千という光が輝く素晴らしい都市を見た。わたくしにとって、新しい生活が始まるべき瞬間であった。

(テキスト1は以上で完訳)

付録としての4つの往復書簡

① ベルトホルト・バイツがヒルデに送った書簡(日付は1947年11月13日)

尊敬するベルガーさん

昨日、わたしはハンブルクのドイツ赤十字を通して、あなたがスウェーデンにいらっしゃるという連絡をいただきました。それによって終わりのみえなかった問い合わせや探索の目標が達成され、そしてわたしは何よりも、あなたの新たな生活にお祝いを申しあげたいです。

いかにしばしば、わたしたち、つまりデリンクさんおよびわたし、わたしの妻、さらにプレヒトがあなたのことを語ったか、あなたはまったくイメージできないでしょう。ボリスラフにおけるドイツ人としてのあなたの運命はわたしたちにとって気がかりだったので。わたしはまだ正確に、当時あなたとどのようにお別れしたのかを覚えています。部隊が隣に立っていたので、あなたは、あなたの人生にそこで幕が下りるのではと大いに心配していましたね。

さて、そこから、簡単にわたしのこれまでの生活と今の生活を述べますと、わたしはベルリンに引っ越し、さらに東部戦線と西部戦線に行き、そして1945年6月3日に健康かつ無傷でハンブルクに下船しました。わたしの家族は1945年の9月に徒歩で緑の国境を越えてグライフスヴァルトからハンブルクに到着し、そして10月にはわたしの2人目の娘、スザンネが誕生しました。スザンネは愛らしい2歳の女の子に成長しました。バーバラはすでに2年間学校に通い、そして背の高いスリムな少女になっています。わたし自身は保険制度の連邦監督庁の管理官です。そしてそれらの状況に相応にわたしは元気です。わたしはハノーバーの郊外に快適な小さな住居を持ち、小さな自家用車に乗り、そしてわたしたち全員が少なくとも健康です。ドイツの

ここでの生活はわたしにポーランドにおける否定的な面を生き生きと思い出させます。しかしその時代もいつかは過ぎ去ってしまい、再び理性的な人間として生きられるようになることを願っています。

今、ヴァルデンプルクに住みついているクライナー、ならびにシュプライス、エアリーについて、わたしは情報を得ています。その人たちはわたしに、きわめて適切に公的に認証された証言を送ってくれました。ここではボリスラフにおけるわたしの活動ないしわたしの行動が確認されています。3人の方は確かに、わたしがそれらの証言をここドイツにおいて必要であるだろうと思っていられるのです。まったく感動的に、わたしのためにヤーヴォアスキーという一人の男性が努力してくれています。あなたはかれをご存知ですか。それどころか、かれはわたしにストックホルムからわたしの子どもたちのために小包を送ってくれました。そしてさらにヒルシュです。ヒルシュは目下、ザルツブルクのマイブルガー・ウーファーの4番街に家族と住んでいます。ヒルシュはわたしをここドイツにおいて探させ、そしてかれもまたわたしの住所を知りました。そしてわたしは次のように言うことができるだけです。その小柄で細身の人が—今でもボリスラフで目の前に立っているかれの姿が目には浮かびます—わたしに大いなる尊敬心を抱かせるような態度を持つ人間に成長したと。かれがわたしに、あなたがスウェーデンにいるらしいが、しかしあなたの住所は知らないということを手紙で知らせてくれたのです。ですから、わたしはあなたの住所をかれに伝えることにします。それはわたしがすべき仕事なのです。そのほか、わたしはあなたの住所をわたしの古くからの知人たちにも伝えるでしょう【この1文については資料の一部が欠損しているゆえに、部分的に推測で訳している】。

プレヒトはほんの少し前にわたしの家を訪れました。かれはオルデンプルクの近所において、羊毛農場を所有する女性と結婚しています。かれは経済的にはうまくいっていると、わたしは思っています。ユンゲはまだオルデンプルクで両親と一緒に暮らしています。マルツさんは、そのことをわたしは残念な気持ちでお伝えしなければならないのですが、1944年秋に心臓の衰弱でお亡くなりになっています。わたしはツェレのかれのお墓を訪れたことがあります。つい先ほど、わたしはまた、給与計算係のクラウゼがロシアの戦争捕虜であったのですが、釈放されたベルリンに戻ってきたという書簡を受け取りました。それ以外では、今でもツェレで活動しているカルパティア団とは、わたしはもう何の関係もありません。わたしは戦後すぐに脱退しました。ここ、イギリス軍占領地域の職と一緒に働いてきたデリンクさんは何週間か前に、イングランドに旅立ち、そして今や再びロンドン近くでイングランド人として生活しています。かの女はわたし

に、あなたの住所を知らせるように強く求めています。

ベルガーさん、わたしがあなたにいつも、わたしたち2人でいつかまた一緒に始めようと言っていたことをまだ覚えておられますか。あなたはそのとき、青ざめて、そして目を大きく開いてわたしを見つめ、そしてきっとそういうことにはならないでしょうと意見をおっしゃいました。モルスキーがポーランドの都市シュテッティンにおける市営パン工場の長であることをご存知ですか。神さまのおかげで、こんなにも多くのことについて話さねばなりません。そしてわたしはしばしば、わたしが完全に救出したボリスラフ時代のさまざまな写真をランダムにながめます。とても快適な回想です。しかし一部は、わたしは繰り返し苦しめる恐ろしい回想です。しかしまったく特別に、わたしはあなたがスウェーデンに行くことに成功なされたことを喜んでおります。いつかベルリンで始めようというわたしたちの決意を、わたしたちは、わたしが何度かベルリンを訪れた後では、きっと諦めなければなりません。と申しますのは、ベルリンはあまりにも酷い状態だからです。

ひょっとして、いつか再び、わたしが、戦争前のように、ヨットでストックホルムに向向き、そしてそこでわたしたちが会うことができるようになるでしょう。わたしはスウェーデンの沿岸をヨットでしばしば訪れたことがあります。ノルウェー南西部のニースタードから出発して、運河、ヴェーネルン湖、ストックホルムを経由して、イエーテボリまで。そのように大急ぎの旅を何度かしたことがあります。

さらに、わたしの父もまたイギリス占領地域におり、そして再び帝国銀行にて働くようになっていることをお伝えします。わたしの母と妹はまだグライフヴァルトにおります。

永遠の少女よ。今、わたしはあなたに詳細な返信を期待します。あなたは今まで何をなさってきたのか、そしてあなたはお元気なのでしょうか。わたしたちはきっと2人で一緒に事業を始めなければなりません。しかしわたしは、あなたはすでに結婚なさっていると想像しています。わたしは、あなたが当時、最良の生き方をなさっていたと考えています。グレネク、カヴァラについては、わたしはまだ何も聞いておりません。

わたしの妻からも心からのご挨拶を。

あなたのベルトホルト・バイツ（署名）

《ヘッセ先生の注釈：上のベルトホルト・バイツのヒルデ・ベルガー宛の書簡は、ベルトホルト・バイツのストックホルムに住むヒルデ・ベルガーへの戦後初の接触であった。ベルトホルト・バイツはドイツ赤十字を通じてヒルデ・ベルガーのスウェーデンにおける住所を知った。かれはハンプルクの実家への着の身着のままな帰還後すぐに、イギリス占領軍当局によって当地での保険制度の再建を委託された。イギリス当局と接触したのは、かれのボリスラフでの秘書長であった。

イギリス人の母親をもつ秘書長は英語を流暢に話すことができたのだ。その際、役立ったのは、かの女がバイツを「カルパティア石油商会」の経験に富む支配人として提案しただけでなく、イギリスの責任者たちに自発的に、SS、ゲシュタポおよび公安警察から無垢な人々を守るためのバイツの無私的な、かつリスクを伴う尽力について報告することが可能であったことだ。》

② ヒルデ・ベルガーがバイツに送った書簡（日付は1947年12月23日）

尊敬するバイツ様！

昨日、かなり長期間の旅行から戻ってきたとき、あなたからの手紙に気づきました。（ですので、わたくしの返信はずいぶん遅くなったのです。そのことを、あなたはきっと変だと思われたことでしょう。）あなたはわたくしの喜びと驚きをイメージできるでしょう。といたしますのも、あなたからいずれ何か知らせをいただけたとはほほ思っていなかったからです。わたくしもまた、あなたの命が救われたことにお祝いを申し上げたいです。といたしますのも、あなたの場合にも異なる結果がありえたからです。とりわけ嬉しく思いましたのは、あなたが比較のお元気であることです。

確かにストックホルムには、わたくしの、たとえ悲劇的なものであるとしても、ポーランド時代の思い出を言い合える知人はいません。しかしわたくしはしばしば、あなたのことを考え、そしてわたくしの体験をお話しする際には、あなたについて語っています。まさにポーランドにおいてもまた、本当に私利私欲なく不幸な犠牲者たちを助けるような立派な性格をお持ちのドイツ人はそれほど存在しなかったのです。しかしそのことはまさしく、人類がきっと永遠に解明することはないであろう次のような問いとも関連しています。文化的にかなり高度なわたくしたちのドイツにおいて、いったいどうしてあのような野蛮が生じたのか。どうかわたくしを誤解しないでください。わたくしは、そもそも責任問題について語ることもできません。すべてのドイツ人に責任があると考え人間ではありません。しかし、わたくしはボリスラフの後も、きっと決して完全には乗り越えることはないであろうさまざまな事を体験いたしました。しかしそれらについて、わたくしは、本来は書きたくなかったのです。あなたの手紙はわたくしのなかに多くの記憶を呼び起こし、そしてまったく当然のことですが、わたくしにさまざまに考えさせました。

あなたに、戦争の間わたくしの身に起こったことを簡単にのみ述べたいです。ボリスラフからの輸送の後、わたくしたちはクラカウ近郊のプラスツォフ強制収容所に到着しました。そこでは、わたくしは幸運にもすぐに事務所に行くことができました。ただし一人の上司（SSの司令隊長）と一緒に。かれは、あらゆる人によって崇拜されたバイツに比べると少々不愉快でし

た。（あなたは、どれほど頻繁にわたくしたちがあなたについて語り、そしてあなたがいらっしやらないことを嘆いたか、お気づきではありません。）クラカウから立ち退かされたとき、わたくしたちはアウシュヴィッツに3週間立ち寄り、その後は幸運にもチェコスロヴァキアの軍需工場に到着しました。—もちろん強制収容所の拘留者および「長期休暇中の死者」として。そこにおいて、わたくしはようやく戦争終結により解放されました。当時わたくしはボリスラフ時代の知人のうちのほんのごく僅かな人としか一緒にではありませんでした。— たいていの人はその間にさまざまな収容所で帰らぬ人になっていました。男性の友だちであったファイナーと、わたくしはブラウツォフにおけるわたくしの事務所での仕事のおかげで最後の収容所でも一緒でした。そしてそばに親しい人がいるということは、まさに当時は途方もなく多くを意味しました。たとえSSの隊員たちの意地悪によって女性と男性は最初の数か月間、一度も互いに口を開けなかったとしても。わたくしたちはその後1945年にポーランドで別れました。わたくしがチェコスロヴァキアに向かったからです。わたくしはポーランドに留まりたくありませんでした。（ちなみに、わたくしがあなたに、ファイナーと結婚したいと言ったとき、いつもいくらか嘘が混じっていました。わたくしはかれをとても好きでした。しかしわたくしたちは根本的にあまりにも違っていました。さらにまったく異なる人生観を有していました。）

プラハでは、わたくしは、すでにベルリン時代から旧知のスウェーデン在住の友人たちと連絡をとることに成功しました。その友人たちは一部は自由意志で、そして一部はゲシュタポによって迫害されてドイツから逃げてきた政治的難民でした。友人たちはわたくしにスウェーデンへの入国査証を用意してくれました。そしてわたくしはまるでメルヘンのなかにいるかのように飛行機でスウェーデンに向かいました。

奇妙なことに、わたくしのなかのあらゆる恐怖体験への反動がようやくスウェーデンで起こりました。1年目はほとんどいつも体調が悪く、そしてやっと1947年1月からフルタイムで働けるようになりました。当初、わたくしは貿易商社で独英の通信員として働き、そしてここ2か月間はあるアメリカの委員会（Komité）で働いています。その委員会によって、わたくしは、働くことができなかった時期に支援を受けたのです。それは、強制連行された人々、ズデーテン地方のドイツ人でナチスに反対した人々などのようなナチズムの犠牲者たちを支援する委員会です。そこでの仕事はわたくしを、同じことの繰り返しで、そして根本的に興味を持ってない事務的な仕事よりもはるかに満足させています。

わたくしの家族については、わたくし以外で生き

残ったのは、1937年にパリに行った1人の妹だけです。わたくしの弟と婚約者は、この間に知ったのですが、ドイツで、強制収容所内で婦らぬ人になっていました。妹は昨年、4歳の息子とともにわたくしに会いに来てくれました。妹は数ヶ月のうちかの女の夫と共にアメリカに移住します。ちなみに妹の夫は「アーリア人」で、そしてベルリン出身です。

デリンクさんはイングランドにいらっしゃると、わたくしは考えています。と申しますのか、かの女は以前わたくしに、母親がイングランド人であると言ったことがあるからです。どうぞ、かの女によるしくお伝えください。とりわけプレヒトさんにも。かれはその礼儀正しい態度によってわたくしはおおいに好感を持っていました。

あなたがそれほど多くのポーランド出身の人々と交流をなさっていることは、わたくしにはまったく驚きではありません。あなたはきっと、あなたという方がわたくしたち全員にとってどれほど重要であったかを想像できないでしょう。たとえ多くの人が、あなたの支援がなるほど限定的でしかなかったということを知っていたとしても。わたくしもまた、感謝と承認があなたを確かに今とりわけ元気にするということが理解しています。しかしあなたが何らかの自分に有利な証人等をおそらく必要としないということは、なおさらわたくしを喜ばせています。わたくしは、あなたのような人はドイツにおける今日の悲惨な状況にあっても、少なくともある程度普通の生活ができるポジションを得ることができると確信しています。確かに今、ドイツは相当に貧困です。－ わたくしは再三、古い知人から支援を求める書簡を得ています。－ 絶望してもおかしくありません。バイツさん、あなたはまさにわたくしとは逆に常に楽観的であり、そして望むらくは今でもそうでしょう。わたくしの場合、確かに何がしか違っていると思えます。わたくしはやむなく根無し草になっており、そしていつかどこかで、たとえ物質的な不安はないとしても、くつろげるとはとても思えないのです。

わたくしは、あなたから書簡をいただいたことを、本当にとても喜んでおります。そしてこの書簡が最後にならないことを希望しております。あなたとあなたのご家族のために、わたくしは真に楽しいクリスマスと幸福な新年をお祈りしております。

あなたのヒルデ・ベルガー

《ヘッセ先生の注釈：上の書簡はベルトホルト・バイツの最初の接触にたいするヒルデ・ベルガーのストックホルムからの返答である。》

③ バイツのヒルデ・ベルガーへの書簡（1948年1月7日付け）

親愛なるベルガー様

－昨日、わたしはあなたの詳細な手紙を受け取りし

た。そしてあなたが本当にお喜びになったと考えます。以下に、幾人かの方の住所をあなたにお伝えします。

【バイツはマルクス・クライナー、ヤン・ヤヴォラキ、レーン・マルスキー、ヨゼフ・ヒルシュ、エミル・ペーター・エーアリヒ、アンリ・エンゲルベルク、エヴェリン・デリンク、クリマー・プレヒトという8名の人物の住所を記載しているが、ここでは割愛する。】

わたしはあなたにその方々の住所をお教えします。それによって、あなたはボリスラフ出身のあなたの古くからの知人と連絡をとることができるでしょう。わたしは言わねばなりません。あなたはボリスラフからの移送後、いずれにせよ幸運をえて、あのまったく非常に死臭ただよう状況から無事に抜け出したと。あなたはとつてもとつても幸運にも、チェコスロヴァキアから空路、ドイツを越えて、称讃される国であるスウェーデンに到達することができたのでした。

わたしは相変わらず元気です。しかしわたしは、今の官僚の仕事をやめて、相応の収入が得られ、そしてまた自分で自分自身のために働くことができるビジネスの世界に移ることを考えています。神様のおかげで、わたしは免責証明を必要としていません。しかしひょっとして、あなたはわたしにボリスラフにおけるわたしの活動に関して宣誓にかわる説明を提供できるのではないのでしょうか。その説明は弁護士あるいは裁判所によって認証されていなければなりません。何よりも、わたしは、メサロス、エーアリヒなどとのわたしの結びつきを介して無罪証明を得ることを重視しています。わたしは場合によってはその証明を使用できます。そしてあなたはまさにご自身、それらすべての会話についてもっともよく情報をお持ちなのです。というのも、あなたは事実かなり多くの情報を与えられていたのですから。

どうかスウェーデンの人々によりしくお伝えください。わたしはまさにヨットで少しか行っていたことがあります。－すでに書いていますように。そしてスウェーデンの人々、そして何よりもスウェーデンの女性たちを思い出すのが好きです。わたしはあなたに断言できます。わたしは相変わらず楽観主義者であり、そしていつしか、わたしたち2人が会えるだろうということ。ベルリンにおいてではないとしても、ハンブルクにおいて。あなたはドイツに来る機会をもつならば、いつでもわたしは歓迎します。わたしの自宅には、あなたに宿泊していただけるスペースが十分にありません。しかしあなたはスウェーデン人としてももちろんハンブルクの有名なホテルのどこかでお過ごしになるでしょう。

あなたは深々とお辞儀をする必要はありません。残念ながら、以前あなたはまさに非常にしばしば深々とお辞儀をなさっていました。－わたしは今なおわたしの机の前で立っているあなたを思い浮かべます。－し

かし誰もが、まさに働いている場所で自身の郷土を新たに建設しなければなりません。とはいえ、あなたは有名な次のようなラテン語の格言をご存知でしょう。ubi bene ibi patria 【バイツ氏はubi bene ubi patriaと誤って記載。意味は「快適な場所が故郷である。」】

楽しく健康で、そして幸せな新年でありますことをお祈りします。そしてもしこれからもお互いに文通していったなら、嬉しいです。一度、個人的にお会いできたなら、なお嬉しく思います。

敬具

あなたのバイツ

《ヘッセ先生の注釈：上のベルトホルト・バイツのヒルデ・ベルガー宛の書簡（1948年1月7日付け）は、素行証明の送付を願うものであった。その願いをヒルデ・ベルガーは拒否した！かの女が私に語ったところによれば、かの女はバイツ宛の拒絶の書簡のなかで理由を一般的に示唆しただけであった。つまりかの女の「道徳観は」ベルガーのものとは違っていると。相応の書簡はおそらく今なお、バイツのプライベートなアーカイブに存在している。かの女の拒絶にたいするわたしの見解は、「かの女は後にそのことを後悔し、そしてそのことを恥じた」というものであった。【第1報におけるヘッセ先生による序文参照のこと。】》

④ ベルトホルト・バイツがヒルデに送った書簡（日付は1948年5月31日、図1参照のこと）

尊敬するベルガーさん！

わたしは4週間南ドイツにいました。あなたはガルミッシュ、ミッテンヴァルト、ミュンヘン、シュトゥットガルトそしてフランクフルトという美しい地名をご

存知でしょう。そしてわたしは日々の灰色の生活からいくらか離れていたのです。そして今、わたしはあなたに簡潔に回答させていただきます。

わたしは、あなたがあたかも精神的に混乱なさっているように思えます。そしてわたしは言わねばなりません。わたしは戦後のヒルデ・ベルガーという人物をイメージしていない、と。しかしわたしは、あの悪い時代のさまざまな影響に今やっと静かな考察のなかで気づくことができるということに完全に理解しています。わたしは、あなたを例えばあなたの新しい生活圏のなかで妨害したり、あるいは不安をもたせたりするという意図を持っていません。わたしはただ、あなたが生きておられることが、そしてわたしたちが生きていることがおおいに嬉しいのです。わたしたちが2人とも死んでいたという可能性は十分にありえたのです。あなたはポーランドで、そしてわたしはロシアで。わたしが当時ボリスラフにおいてきわめて厳しい状況にあったということは、あなたにとってきっとまったく意識されることではないのでしょうか。というのはあなたの書簡の語調はわたしに、あなたは、わたしが常に日の当たる側にいたとお考えであることを示しています。とはいえ、もしわたしの行為が知られば、わたしはドロホビッチにおいて、さまざまなドイツ人の大なる喜びと高らかな拍手によって称揚されるだろうということ、あなたはイメージできるでしょう。わたしは、あなたがスウェーデンの国籍をお持ちでなく、そしてそこでは難民（displaced person）としてしか登録されていないということに心配しています。しかしわたしには、あなたがあなたの出生証明書にもとづいて直ちにベルリンに移住し、そしてまた、もちろんスウェーデンのような煌びやかな外的条件のもとではありませんが、ドイツ国籍を取得できると思えます。ベルガーさん、わたしはあなたの書簡について決して怒ってはいません。しかしあなたと一度、正しく「ドイツ語で」話し合わねばなりません。

もう一度再会するという希望のなかで...

敬具

あなたの ベルトホルト・バイツ（署名）

追伸：さらにあなたに、わたし家族も私も依然として元気であるとお伝えします。わたしたち皆は、将来の通貨改革が最終的にわたしの地位にもまた、外的な成功をもたらしてくれると考えております。

《ヘッセ先生の注釈：1948年5月13日付けのバイツ氏からヒルデさんへの書簡であり、依頼にたいするヒルデさんの拒絶への反応である。わたしは個人的に「ベルガーさん、わたしはあなたの書簡について決して怒ってはいません。しかしあなたと一度、正しく『ドイツ語で』話し合わねばなりません」という部分が気に入っている。わたしは、ベルガーが正しいと考える。ヒルデ・ベルガーもまた後に、この書簡を読み、そして自身の当時の行動を悔いている。》

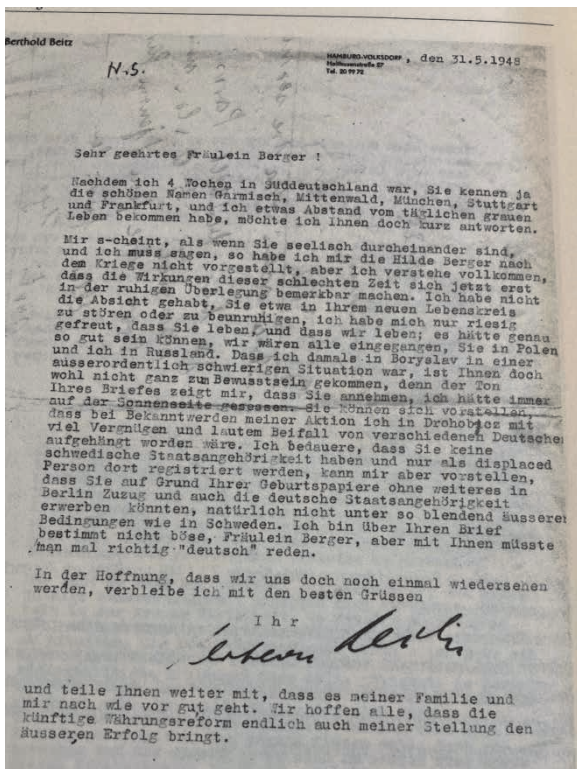


図1 1948年5月31日付け書簡

2. テキスト2：マーク・スミスとの対談（1978年6月19日～21日）

マーク：あなたは1914年ベルリンでお生まれになったのですね。開戦前だったのですか。

ヒルデ：そうです。戦争が勃発する前に生まれていました。それはそうと、そのことについてわたくしの家庭には逸話があります。以前にお話したことがありますが、うちは婦人服のお店でした。少女のとき、わたくしはときどき売るのを手伝い、そしてお客さんたちと会話をしました。たいていは、母が売り場にいました。父は商売にかかわろうとしませんでした。

マーク：そのお店はベルリンのどちらにあったのですか。

ヒルデ：クロイツベルク区（マリアネン街34番地）です。ベルリンのユダヤ人地域ではありません。わたくしたちの地区において非常に数少ないユダヤ人商店の1つでした。安息日には休業しました。

マーク：ところで、さっきおっしゃった逸話って何ですか。

ヒルデ：わたくしは、母がお客さんとある一定の品物について話すのを聞きました。母は「それは平和な商品です」と言いました。—すなわち平和な時代の品物であり、それゆえ良い品質であると。そのことを聞いたとき、わたくしは「だったら、私も平和な商品だ！」と言いました。その後も、わたくしと母はしばしばその話をし、そして笑ったものです。

マーク：どのような学校に通ったのですか。普通の、公立学校だったのですか？

ヒルデ：そうです。最初、わたくしは近所の角を曲がったところにあった民衆学校に通いました。ですので、道路を横切る必要はなかったのです。それ以前わたくしたちは学校から2つ道路を隔てたところに住んでいました。その頃、わたくしの姉のレギーナがもう少しで路面電車で轢かれかけたことがありました。姉は衝突した際に鼻を骨折しました。父はそのような事故からわたくしたちを守りたいと思いました。もっとも当時、ベルリンの交通量はそれほど多くはなかったのですが。

学校では、わたくしは学級担任のお気に入りでした。かれはわたくしのことを「ヒルドちゃん・ベルガーちゃん」とよびました。それはかなり異様なことでした。ある日、学級担任はわたくしの母を話があると学校に招きました。かれは母に言いました。わたくしが、中等学校の1つである女子高等学校（Lyzeum）に進学すべきだと。そしてわたくしを女学校に進学させるために、母はあらゆる努力をすべきだと。

マーク：ギムナジウムですか？

ヒルデ：いえ、リュツェウムです。それはドイツでは通常かなり授業料が高かったです。教師は、もしわたくしが14歳までしか学校に通わなかったら、そ

れは犯罪であると言いました。14歳までというのは、通常の民衆学校の通学期間でした。

父は、教師と話すようなことには関わりませんでした。母は商店以外にいつも子どもたちの諸要件にも気にかけていました。父は最も多くの時間をトーラー【（ヘブライ語：תּוֹרָה, 英語：Torah）ユダヤ教の聖書における最初の「モーセ五書」のこと。また、それに関する注釈を加えてユダヤ教の教え全体を指す場合もある】とタルムード（（ヘブライ語：תּוֹרַת תּוֹרָה Talmud, 「研究」の意）は、モーセが伝えたもう一つの律法とされる「口伝律法」を収めた文書群である。6部構成、63編からなり、ラビの教えを中心とした現代のユダヤ教の主要教派の多くが聖典として認めており、ユダヤ教徒の生活・信仰のもととなっている】の研究に使いたかったのです。

それゆえ母が近所にある私立のリュツェウムの校長（女性）のところに出向き、そして校長に、自分には4人の子どもがおり、そして授業料を全額は支払えないと語りました。母は校長先生に、わたくしの担任の先生の提案を示し、そして最終的に母は授業料を半額にすることに成功しました。

わたくしの姉、レギーナは14歳まで民衆学校に通っただけでした。先生は、かの女は才能がないと考えていました。したがってわたくしの両親は、レギーナは進学してもうまくいかないと考え、そして中等学校に通わせようとしなかったのです。

後に、わたくしの弟であるハンスちゃんがその年齢に達したとき、母はかれのためにレギーナとまったく同じようにしようと決めました。それゆえ、わたくしは弟がわたくしよりはるかに才能があると言わねばなりませんでした。かれは本当にダイヤモンドのように輝いていました。かれがより良い教育を受けるということに疑問の余地はありませんでした。それゆえ母はかれを高等実科学校に通わせました。その学校もまたわたくしたちの住まいから遠くは離れていませんでした。かれは徒歩で通学できました。わたくしは、きょうだいたちのなかで弟がいちばん好きであることを告白しなければなりません。弟はわたくしよりも1歳半、年下です。しかしわたくしたちはとても似ていました。弟はきょうだいたちのなかでわたくしを一番好きで、そしてわたくしも、他のきょうだいたちよりも、かれが好きでした。わたくしたちは、子どもだった頃に似ていただけでなく、成人になって以降も似ていました。

しかし、わたくしの姉に話を戻しましょう。かの女はわたくしたちのなかでもっとも才能がなく、もっとも魅力がありませんでした。とはいえかの女は決して醜くはありませんでした。しかしわたくしたちはみな、かの女よりは容姿に恵まれていたのです。両方とも、すなわち身体的様子も知的才能も、わたくしを含む他のきょうだいほどではなかったのです。かの女が学校で成績をあげていないことを知ったとき、父はかの女

が手縫いを学ぶことを欲しました。父は仕立て屋だったので、かれはかの女を自分で教えたのです。しかしかの女はその点でもあまり器用ではありませんでした。さらに父が、かの女に手縫いを教えた仕方も誤っていました。かれは心理学についてまったく知識をもっていなかったのです。

父はドイツ語の本を1冊も読んでいませんでした。父が読んだ数少ない本はトーラーとタルムードだけでした。父は演劇鑑賞も、映画鑑賞もすることがありませんでした。父はドイツ語の新聞を読みませんでした。母は読んでいました。わたくしの父は唯一、ユダヤの生活とユダヤ教にのみ関心がありました。それらは父が関心をもったすべてでした。とはいえもちろん自分の家族にも関心がありました。そしてもうひとつのことにも関心がありました。すなわち、かれは「ツェダカー」【「義」と訳されているヘブライ語「ツェダカー」は、ギリシャ語の「義」と同じ意味である。ユダヤ文化の中で、ツェダカーは次第に「施し」を意味するようになった】を、つまり貧しいユダヤ人に何かを与え、そして貧しいユダヤ人を支援することを信じていました。かれはパレスチナにある組織を持っていました。そこに父はお金を送り、そしてそのお金が受け取られたことの証明のための若干の記念の品をえていました。父にとって、パレスチナは決して民族国家ではなかったのです。父はシオニストではなかったのです。父にとってパレスチナは聖書にある「エレッツ・イスラエル」《イスラエルの地》でした。父はパレスチナを宗教的、かつ伝統的にしか見ていませんでした。

マーク：寄付すると、パラスチナの土の入った袋をもらい、その土を自分の墓に撒くことができるでしょう。

ヒルデ：わたくしは、父がまたパラスチナで何かを買ったと思っています。数本の樹木あるいは小さな土地を。

マーク：少し話題を変えます。あなたがたきょうだいは互いに何語で会話したのですか？

ヒルデ：ドイツ語で。

マーク：そしてどのような言語で、あなたがたはお父さまと話したのですか？

ヒルデ：やはりドイツ語です。わたくしたちはイディッシュ語【東欧のユダヤ人の間で話されていたドイツ語に近い言葉】を話しませんでした。

マーク：そして何語で、お父さまはみなさんにお答えになったのですか？

ヒルデ：たいていはイディッシュ語、あるいはブロークンなドイツ語です。しかしイディッシュ語のことが多かったです。

父が姉を叱るときはいつも、母は姉の味方をしました。母は父よりも賢くかつ物分かりが良かったです。そして母は姉を守り、そして擁護しようとしたのですが、しかしいつもうまくいくとは限りませんでした。父は

姉を責めることは止めませんでした。父は姉に不満でした。父は姉が「成功」しておらず、姉が自分の要求は希望に答えていないことに不満でした。不幸にも、父自身がおそらく、姉が十分に成長しなかったことの原因だったのです。父は、姉がなすことに対してあまりにもネガティブで、そして徹底的に批判的であったので、父は、姉のなかで成長できたかもしれないことすべてを阻んだのでした。すでにお話したように、父は心理学について、子どもの教育について、あるいは教育原理について何も理解していませんでした。

わたくしたち他のきょうだいは、そのすべてを理解するには若すぎました。わたくしたちがその姉と対立していたわけではなかったのですが、しかしわたくしたちは姉からいくらか距離をとっていました。わたくしたちが後に政治運動において参加したとき、わたくしたちは、姉はそのことについて十分に理解せず、そしてそれについて何も貢献できないか、あるいはそうでなくても役には立ちえないと考えました。わたくしたちはいずれにせよ姉に、一緒にやろうと励ますことはなかったのです。言い換えれば、わたくしたちは父と同じだったのです。わたくしたちはあまりにも利己的でした。わたくしたちはわたくしたちの生活と活動、つまりハイキング、討論およびディベートに過度に巻き込まれていたのです。わたくしたちは政治意識を獲得していたのです。最初はシオニストのグループ、その後は社会主義のグループ、共産主義のグループ、そして最後にトロツキー主義のグループというように。

マーク：お姉さんはすすんでいかなる友人関係も結ばなかったのですか？

ヒルデ：そうです。姉は社交的ではなかったです。かの女は登校し、下校し、お店を手伝い、何かを縫い、母を助けました。しかしかの女はあまり器用ではなかったのです。かの女は2本の左手をもっていました。

マーク：きっと、かの女は自分に自信がなく、びくびくしていたのでしょう。

ヒルデ：そうです。姉はびくびくしていました。父はいつも姉を批判していたからです。そしてわたくしたちはかの女を助けなかったのです。それは非常に残酷なことだったと思います。

マーク：だからといって、自分を責める必要はないでしょう。何といても、あなたは後に、そのことを認識したのですから。

ヒルデ：わたくしは家を出て、そしてそれから自分自身の生活、自分自身の問題を持つことになりました。

マーク：そして弟さんは？

ヒルデ：弟は拘束されました【それについては後に言及される。】

(この項、未完)

(2021年9月6日受理)